木霊たちの夏

桑原恭子

風媒社

木霊たちの夏

1986年2月15日　第1刷発行

定価 1,600円

著者 桑原恭子

発行者 稲垣喜代志

発行所 名古屋市中区上前津2-9-14　久野ビル
電話052-331-0008 振替・名古屋ビル8-5616 風媒社

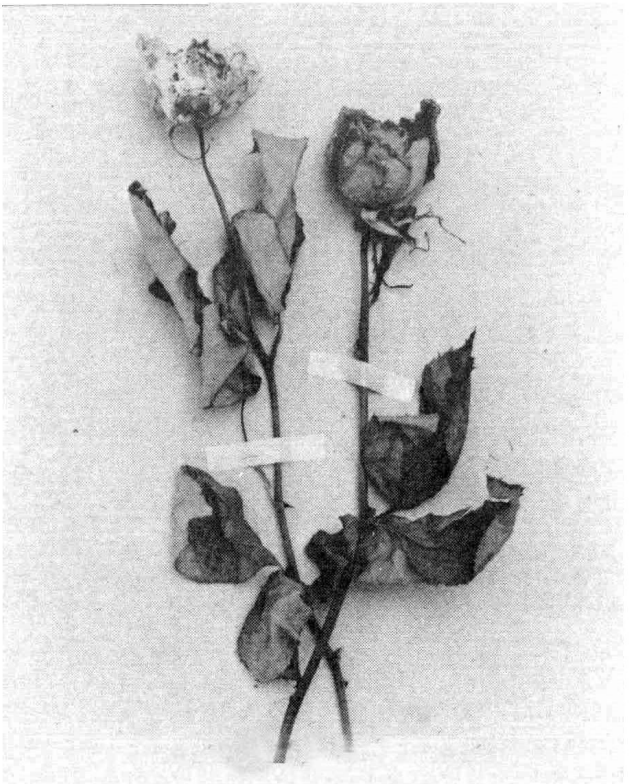
＊乱丁・落丁本はお取り替えいたします。　＊三協印刷

0093-9936-7302

装幀・夫馬孝／写真・勝田安彦

木霊たちの夏

桑原恭子



風媒社

目次

虫祀り　7
壺をくだく　33
風のみち　77
木霊たちの夏　133

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木霊たちの夏

虫祀り

マンションが欲しい、マンションを買いたいわ――

女は男と会うたび、そんな言葉を口にするようになっていた。そればかりでなく、ここ何年ものあいだに新聞に折込まれてきたその種のちらしを、ひとかかえたくわえこんでいた。勤めから帰ると、アパートの居間にそれらを一枚一枚並べ、彼女自身はその真中に坐って、ゆっくりコーヒーを喫みながら眺め遣るのが娯しみだった。ちらしの内容は実に多種多様であった。まるで中世ヨーロッパの貴族の館かと思われるような、重厚なデザインのから、外壁に貼られた明るい褐色のレンガが、いかにも高級マンションのイメージを誘うのや、丈ばかり高くて安手な感じのま

で、おそらく、考えられるデザインの殆どが揃っていた。部屋の間取りに至ってはその何倍の種類になるだろう。仕切りのないワンルームから5ＬＤＫまで、外見はベランダの広さも間仕切りも同じようにみえながら、各戸に変化が工夫されているのに女は感嘆し、何度眺めても見飽きないのだった。ただ近頃のマンションは、次第に間数がふえ、外観も豪華になる一方なのが気に入らない。もともと手近でないものが、いっそう夢物語へ遠のく心地がするのであった。

女のお気に入りは、二年ほど前に折り込まれてきた半紙大のちらしである。五階建の屋上の一部に青い陶瓦を飾ったマンションで、クリーム色の壁とセピア色のベランダと、その飾り瓦との調和が、なにやらおとぎの国の城めいたイメージを与えている。裏には幾種類かの間取り図が印刷されていて、そのなかに、間仕切りは2ＬＤＫながらベランダが東南にまたがったのがあった。とくに、外へ大きくカーヴした南面のベランダは、そこに寝椅子を置いて日光浴もできそうに思われた。

「もちろん五階ですから、人目を気にせず日光浴もできますし、鉢植えの樹などを並べれば、ちょっとした庭の感じも娯しんで戴けます」

と案内嬢は、人形のように表情を崩さず微笑んでいった。そのちらしにあった《内覧会》の期間中に、女は実際にそのマンションに出向いて、目的の部屋を検分してきたのだった。

南は、三方を樹木に囲まれた小公園に面し、東はさして広くない公道に面していた。公道の反対側は、石垣や黒塀の内に深々と照葉樹や静寂をかかえこんだ住宅地だった。この道なら車の通

行量も多くはないだろう。たとえ車の往来があったところで、その音がここまではねあがってきはしないだろう。女は何よりもここで存分に静寂が味わえそうなのに心惹かれた。それは逆にいえば、万一ここから、助けてと叫ばねばならないときにも、その声は下まで届かないことになるだろうか。折りしも下の道を、青いGパンに白いセーターを着た青年がやってくるのを見下ろしながら、声をかけたら届くだろうかと女は訊いてみた。

さあ、と案内嬢はベランダの手摺から身を乗りだして、一瞬、下の青年に呼びかける顔になった。

「でも、五階ですから、無理だと思います」

「そうでしょうね」

女が頷くと、案内嬢はばかな質問につきあったというふうに瞼をしばたき、他の客の方へいってしまった。がそのとき思いがけないことが起った。道の青年が女の心の声を聞き届けたように、マンションをふり仰いで微笑んだのだった。

マンションが欲しい、マンションを買いたいわ、と口にするたび女は以来きまってそのマンションを思いうかべた。しかし男は、女のそのひとつことがはじまると、たちまち他人めいた顔になって、

「ほらほら、はじまった」と笑うばかりであった。

「だいたい、そんなもの買ってどうなるというのかね、遺してやる跡継ぎもないというのに」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あら、家というのは子孫のために買うわけじゃないでしょ」
女は言い返しながら、なぜそんなものを欲しがるのかとなると、自分でもわからないのだった。いまのアパート暮しに不自由しているわけではなかったし、見栄を張らねばならないつきあいがあるわけでもなかった。ただ考えてみると、それはかれこれ十年にもなる男とのかかわりのなかで、じわじわと育ってきた願望のように思われてならない。男との密会がどこかでその願望とかかわっている気がするのであった。しかしそのくせ、望みのマンションの望みの部屋に自分の姿を置いてみても、女は男と二人ながらそこに籠っているさまは描き出せなかった。どう念じてみても、現われてくるのはいつも女ひとりが、髪形も化粧も妙に若やいで洗濯物をたたんだり鍋を煮立てているのだった。もっとも、その背後に自分以外の何者かがいることは、気配として女にも感じとれたし、その何者かのために自分がいそいそと立ち働いているのも、自身の気持に照らしてみて確かなのだが、その何者かが、十年も馴染んだ男であるという確信はないのである。彼かも知れないが、まったく別の男かも知れない。いや、もっと正確にいえば、それは固有の誰かというより、人の型をした空虚なのであった。何年か前、女がはじめてその人型をした空虚に気づいたときから、それは少しも変っていない。白っぽく人型に脱けたまま、誰の姿も結ばないのである。そして女はもうとっくに、そこへ男を当て嵌める努力を放棄してしまっていた。
女はもともと、愛と呼べるほどのたかぶりがあって男と結ばれたのではなかった。男が他の町の支店から、当時女の勤めていた支店へ移ってきたのが二人の出会いになったが、そのときから

してすでにどちらも充分に分別を備えた年齢にあった。男が新任の支店長次長として紹介された日から一週間後に、歓迎会がひらかれ、彼が四十そこそこで異例の出世街道をのぼっていると聞かされたときも、女には特別の興味も関心もなかった。何人かの男たちが歓迎の挨拶を贈り、最後に男が、窮屈そうにふくらんだ背広の前ボタンをはずして、巧みなくだけようで感謝の言葉をのべた。それにも女はただ、男がさすがに世馴れていることを認めたにすぎなかった。それが歓迎会の二次会三次会とすすんで、気がついたときは、女のアパートで二人ながら肩の寒さに目を覚ます仕儀となった。女のにおいのしみこんだ蒲団に向き合うと、蒼ざめて言葉もない男を、女はむしろ気の毒に思った。こんなことになったのには、酒や男のせいだけとはいえない、自分にも責任があるのだと思った。女がそれをいうと、男はほっと肩を落した。それから脱ぎ散らかしたズボンやネクタイをもぞもぞと身につけると、無言のまま深々と頭を下げて帰っていった。そんな男を見送っても、女は不思議に無感動だった。自分の部屋から帰ってゆく男をみるのは、それがはじめてではなかったし、そのとき女を捉えていたのは、たとえ男とのことはこれっきりになっても、今夜のことをきっかけに自分の日常の時間が、少しは変ってゆくのではないかというひりひりするような期待でしかなかった。

男はその後しばらく女を避けていた。女もまたそれを当り前と受け流しているうちに、男のほうがどうやら何かを見極めたらしかった。

半年ごとの決算期の残業がつづいた最後の夜、先に帰ったはずの男がふらりと戻ってきて、帰

り仕度をしている女をねぎらう口調で夕食に誘ったことから、二人のあいだが再燃した。もっとも、最初の結ばれかたは、飲酒運転が招いた出合いがしらの交通事故のようなものであったから、二度目のその夜が本当の意味のはじまりであったかも知れない。女はその前日に三十歳になっていた。男はそれを聞くと、「もっとずっと若いかと思っていた」と、複雑にゆれる表情をみせた。

「その年まで結婚は……」

一度するはずだった、とだけ女はこたえて自分からその話を打ち切った。二十(はたち)の年に、愛し合って結婚の約束まで交したその青年と別れてしまったのは、定職を持たない青年との結婚に、女の母親が強硬に反対したからであった。青年は女に家出を求めた。が女にその勇気がないまま、結局親に説得され、一方的に音信を絶ってしまった。何年かして当の青年から、南国の町で家庭を持ったという便りが届いたが、女はそのときはじめて、自分が失ったものを思い知らされた気がした。そしてそのことは、かつての自分の裏切りとともに、ずっと彼女の負い目になっていた。

「世の中は皮肉だね」と男は慰め顔でいった。「君のようにおとなしい、いい奥さんになれるタイプの女が独りでいて、口うるさい厭味なのが女房におさまって大きな面をしているんだから」

女は声を出して笑った。まるで自分がそういう女房の直接の被害者であるかのような、男の口吻りが可笑しかった。

「残念ね、私がいい奥さんになれるというのは、折角ですけどお見立てちがいよ。私はいい奥さんのタイプじゃないし、そんなタイプは好きじゃないもの」

「どうしてさ」
「どうしてって、それは、たとえば蜘蛛に対して、どうして獲物を毒殺するのか、どうして糸でぐるぐる巻きにするのかと訊くようなものじゃないかしら」
女は言いながらふと、子供の頃よく母に叱られたことを思い出した。
「机の抽斗にこんなもの入れちゃいけないといってるでしょ。何度いったらわかるの、この子は。みてごらん、虫の糞だらけじゃない。汚いったらありゃしない」
もの心つく頃から父親を知らずに育った女は、その穴埋めのように、いろんな虫を捕えてきては隠れ飼っていた。生きもの嫌いの母にみつかればたちまち捨てられてしまうため、机の抽斗から玩具の針箱、筆入れと隠し場所に知慧をしぼったのだが、たいてい何種類も揃わないうちにみつけられてしまった。たとえそうならなくても、狭いところに閉じこめられた虫たちは、おそらく寿命の半分もまっとうしないうちに次々と死んでしまった。しかし死んだ虫たちも女は好きだった。肢を縮めてこちこちになったテントウ虫やコガネ虫や、カミキリ虫、ハ虫などは、生きてあるときより硬質の美しさが感じられた。夜、電灯の光の下にそれらを並べて、四方から角度を変えて眺めると、虫たちは、あるいは翡翠のように、エメラルドのように、オパールのように煌いて、この世ならぬものを見るような陶酔へ女を引き込んだ。
そんな虫の美しさを女に教えたのは、近所に住む先輩格の少年だった。少年は立派な標本箱をいくつも持っていた。蝶一色の箱から蟬、蜻蛉、カブト虫、ハンミョウなどを混ぜ合わせたのま

で。その殆どを自分で蒐集したという少年に、女は心からの尊敬を抱いた。あたしにもできるかしらと訊くと、できるさと少年は無造作にこたえた。それから毒針で、悶死させたばかりのバッタの腹に薄刃のナイフを当てながら教えをたれた。

「みてろよ、こういうバッタとかとくにカマキリなんかは肉食だからね、こうして腹わたを出してやらないと、腹が腐って切れてしまうんだ」

少年のナイフの動きにつれてバッタの腹から、仄白い花芯のようなものが溢れ出してきた。

「まあ、きれい」

と女は感嘆した。

「おまえ知ってるか、昆虫と虫とは似てるけどちがうんだよ。蜘蛛とかデンデン虫なんかは昆虫じゃないんだ」

女の嘆声に煽られたように少年はそんなことも教えてくれた。その少年から女は一匹のカメ虫を貰いうけた。名前通り亀に似た昆虫だった。緑色の背中に描かれた赤い線の模様も亀の甲に似ていた。光にかざすとそれは、軀のまわりに虹色のスペクトルを放った。それが少年にとってどれほど大切なものであるか、きかなくても女にはわかった。

「あたし、大事にする。あんただと思って大事にする」

女は美しいその虫をお守袋にしまって肌身につけた。これだけは絶対母にみつかってはならないと思った。

しかし、その後あのカメ虫はどうなったのだったろう……女が小学校を終える前に、少年は他の都市へ引越してしまい、やがて女も成長につれて虫蒐めから遠のいてしまったのだったが、当時を思いうかべると、過去のどの時間よりも女は胸の疼く懐しさにかられた。もしあの頃に還れるものなら、残りの寿命を虫にやってしまってもいいと思うほどだった。

この人があのときの少年だったら、どんなに嬉しいだろう。女はそんな思いを心の端に走らせながら男の腕に身を預けた。

その夜から月に一度か二度、女は男と隠れ会うようになった。共通の勤務先からほど遠い場末の町に落ち合い、夕食をとったあと暗い路地裏にひっそりとネオンを灯すホテルの門をくぐるのであった。

男は転任する前の町に、妻と二人の子供を遺してきていた。上の子が高校進学を控えているため、というのは表向きの理由で、この都市への転任そのものが実は、まもなく空席のできる首都の支店の最高ポストへのステップにすぎないからである、との噂があった。それを裏付けるように、職場での男は仕事にも部下にも鷹揚にふるまっていた。しかしその一方、大きな決断の求められる場合には、支店長以上の力を発揮したので、噂はいっそう重みを加えるのだった。

男はまた、以前のように女とのあいだに不自然な距離を置くこともなく、部下の一人として公平に扱うようにもなった。女がたまたま接客中の男に呼ばれて、必要な数字をはじき出して持ってゆくと、男は女の仕事の速さをたたえる軽い冗談を口にすることさえあった。そんなとき、男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com